
紅葉(リュウ×呉葉)

枯葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅葉（リュウ×呉葉）

【Nコード】

N1483B

【作者名】

枯葉

【あらすじ】

ハヤブサと、幼馴染の呉葉との一コマを書いてみました！この力
ツプルも中々好きです♪

古風な家の前に、包みを携えた美しい少女が立っている。
艶のある黒髪に白い肌、

巫女衣装に身を包んだその姿は、可憐な人形のようなのである。

実際、彼女は隼の里の「奥の院」巫女で、

そこに封印されている魔剣「黒龍丸」を護っていた。

「ごめんください」

さえずるような優しい声が響いた。

「呉葉」

ほどなく、少女と同年代の少年が家から出て来た。

茶色い髪に緑の目、端正で利発そうな顔付き。

「リュウ様。これ、お茶の葉です。」

よく出来たからジョウ様とどうぞって母様が」

「ありがとう。いつも、すまない」

彼はそう言って、呉葉が差し出した包みを受け取る。すると

「呉葉、上がって行かないか？」

龍とどこことなく似ている男が顔を覗かせた。

「ちようど暇していたんだ、なあ龍」

「あ、あの……」

呉葉はリュウをちらつと見てほんのりと頬を赤く染めた。

「父さん、突然出て来て…呉葉が驚いてるでしょう」

「おや、すまないね」

呉葉は慌てて首を振った。

「いいえ、おじ様」

「それで、どうする？上がって行くだろう？是非上がって行きなさい、

奥で待っているから」

ジョウはそう言うときすぐ引込んだ。

「本当によろしいんでしょうか…」

「何が？」

「迷惑では？」

「まさか。でも呉葉、無理をするなよ」

「いいえ、嬉しいです。久しぶりですから」

にこにこしながら呉葉が答える。龍は呉葉の笑顔を見つめた。

「…二人なのに、敬語に戻ってる」

「あつごめんなさい」

呉葉は思わず口を押さえた。

「謝らなくていいさ、でも呉葉と仲良くなるのは大変だ」

「え？」

「仲良くなれたと思ったら、すぐ元に戻るんだから」

龍は微笑みながらそう言い、扉を開いたまま素早く中に入ってしまった。

「だってリュウ様…リュウは…」

何事も無ければ、将来彼は頭首になるかもしれない。

彼に対する礼儀は最近になってから特に厳しくしつけられるようになった。

彼もそれは知っている。

幼い頃から、二人はよく一緒に遊んでいた。

当時は気にもとめなかったのに。

だが今では、敬語でいない時はごく稀だ。

それは二人きりでいられるほんの少しの間だけだった…

「どうした、早くおいで。呉葉のくれたこれで、お茶をいれるよ」

「うんっ」

呉葉は急いで門をくぐった。

呉葉は久しぶりに龍の家へ足を踏み入れた。

和やかなお茶会だった。

龍の父ジョウもご機嫌でよく話した。

その帰り道。

「呉葉が来て、父さん機嫌がよかったな」

呉葉を家まで送る際、

ぼつりと呟く龍の言葉に、呉葉の頬がぼつと赤くなる。

『呉葉は、私の初恋の女性にとても似ているよ』

龍の父ジョウは微笑みながらそう言った。

「あれは母さんに聞かせられないな。君の母さんの事だからね」

龍の父と呉葉の父は親友でありライバルで、

呉葉の母を巡り火花を散らした事もあるとかないとか。

呉葉がくすくす笑う。

「リュウのお母様、きっと全てご存じよ。

…たまに母様が言うの、『惜しい事をしたわ』って。

それがきっかけで父様と喧嘩になるのよ」

「楽しそうだな」

「ええ」

呉葉の両親は仲がよかった。しかし上には上がいる。

龍の両親は評判のおしどり夫婦で、呉葉も二人のような夫婦に憧れていた。

「私ね…リュウのお母様みたいに異国の血が入ってたらと思うの。

髪も茶色で、目も貴方と同じ緑で…」

「何故？」

「え？だ、だって、リュウのお母様、本当にお綺麗なんですもの」

リュウと同じサラサラの明るい茶髪。リュウと同じ、優しい緑の目。

繊細で整った顔に、細い優美な身体つき。

「呉葉だって綺麗だ」

「えっ…」

「珍しいな、呉葉らしくない」

龍が手を差し出して来た。

「…少し不安で…」

呉葉はその手をそつと握り返す。

「うん？」

「好きになる方や、お付き合いの仕方って、親と似るそうよ」

「??？」

龍はきよとんとして首を傾げた。

「リュウはいつか緑の目の、異国の人の所へ行ってしまうかもしれないって」

「…お前がいる限り、それは無いと思うが」

「いなくなったら？」

「呉葉、そんな事にはならない。お前は俺が守る、俺は、もっと強くなるから」

「うん」

呉葉は嬉しそうに、しっかりと龍の手を握り直した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1483b/>

紅葉(リュウ×呉葉)

2010年10月23日13時19分発行